馬路村の経験に見る日本の中山間地域の内発的開発

ｗ078027　湯浅友子
ｗ070047　岩本かおり
ｗ070064　大内亜里紗
ｗ070330　別所瑠里子
ｗ070343　桝本和沙

＜はじめに＞

私たちは、国際文化学部の斎藤ゼミに所属している４回生です。私たちのゼミは発展途上国の開発と国際協力の役割について学んでいます。

途上国は紛争や自然災害、人口増加など様々な問題を抱えています。その中で私たちは、農村の過疎化や地場産業の衰退または地場産業が無いことによる貧困問題に着目しました。一方、日本の中山間地域においても過疎化による後継者不足や土地の荒廃など農村をめぐる深刻な問題が存在します。私たちは、官民が連携して上手く住民を巻き込んだ取り組みを行うことにより、農産品と村のブランド化に成功した高知県の馬路村の存在を知りました。馬路村は経済発展や雇用創出など地域活性化のモデル地域として国内外から注目されています。そこで夏季休暇を利用して足を運び、実際に村の内外でどのような取り組みを行っているのか、取り組む上で苦労したこと、また今後の展望などを村の方々から直接聞き、途上国の農村開発に応用できることや、そのヒントがないか探ることにしました。

馬路村は近隣の市町村が合併する中、農業協同組合が単独での生き残りを図りました。

馬路村の特産物である「ゆず」は青果としての価値が低いためそのまま市場に出すことができないことを逆手にとって、ゆずを使った製品の加工販売を行うことによって村おこしをしようと決断しました。村の活動は１９８８年に始まりました。最初に発売された「ごっくん馬路村」というゆずジュースを筆頭に全国へと広まり、現在では県外へ向けたお中元やお歳暮の定番商品となり、百貨店やスーパーの店頭にも並ぶようになりました。

このレポートでは、村おこしのきっかけとなったゆずジュースの開発に携わった東谷望史氏へのインタビュー、ゆずの加工場や村の杉を使った商品を製作しているエコアス馬路村の工場などいくつかの施設を訪問した際に学んだ事を報告します。

＜馬路村の村おこし　～馬路村観光協会長の話を聞いて～＞

馬路村の発展に携わってきた東谷氏にお話を伺うことができました。（写真１）私たちは、馬路村の村おこしの成功例は発展途上国に活かすことができると思っていました。成功例を発展途上国に活かすことが出来れば衰退している地域と現地の人々の生活を活気づけることができるのではないかと思ったのです。東谷氏にこのようなお話

をすると、発展途上国では馬路村のような村おこしは不可能だとおっしゃいました。馬路村はゆずを使った様々な製品で発展してきました。そのようなことができたのは日本には豊かな食文化があり、衛生管理、交通輸送関連のシステムが出来上がっているからだというのです。つまりその土地ならではの食文化や交通運輸システムが出来上がっていない場所では馬路村のような村おこしは期待できないというのです。

また、どうやってここまで村おこしを成功させることができたのかと質問したところ、小さな成功を積み重ねること、ぐいぐいひっぱるリーダーシップが大事であり、専門家のアドバイスを聞き、間違っていれば方向転換をする柔軟性も大事であるとおっしゃいました。そして、製品を作るときは村の中にいるとどうすればいいのか分からないため、自分自身がお客さんだったらどのようなものが欲しいのか客観的に考えていくことが必要ということでした。

次から次へと新しい製品を開発されており、最近では新しく化粧品も出す予定だそうです。この化粧品は「村で作り、村から送る」がコンセプトです。その理由は、外に依頼すればお客様には手数料がかかり、改良をしたいときにすぐに改良ができないという理由からだそうです。また、主要商品である飲料、「ごっくん馬路村」はペットボトルではなくビンで作られています。なぜ単価も安く便利なペットボトルにしないのかと聞いたところ、「ごっくん馬路村」はお中元としてよく使われるのでペットボトルにするとギフトにふさわしくなく、ビンのほうが美味しいというイメージがあると考えているため、１９８８年の発売当初からビンのままなのだそうです。

以上のことから村おこしとして重要な商品開発ではそれらの商品が愛されるように明確なコンセプトを持たせ、お客様からお客様へと商品が広まってゆくように一つひとつの商品に対して品質に対する責任を持ち、工夫をしなければいけないということを学びました。

東谷氏にお話を伺い、村おこしの成功は現状に満足せずに挑戦していく姿勢や、常に消費者の立場に立って消費者のことを考える姿勢が日本で村おこしを成功させる秘訣だと感じました。

写真１：インタビュー後　東谷望史氏と

＜ゆず加工場の訪問＞

ゆずの加工場「ゆずの森」の名の通り、小さな森を通り抜けたところに加工場があります。

内装はすべて魚梁瀬(やなせ)杉で作られていました。工場内は靴を脱いで見学します。そのためスリッパも用意されていましたが、「素足で杉の感触をお楽しみ下さい」と書かれた看板があり、実際に素足で歩い

てみると、杉の香りや感触など自然のぬくもりを感じることができました。

この工場の目的は第一に製品製造、第二に馬路村を訪れた人にゆずの加工品の製造出荷過程を見せることです。そのため工場の２階には受付、研修室、受注センター、配送センター、デザイン室と多機能な設備がありました。すべてガラス張りで外から作業の様子を見学することができました。また１階に工場があります。工場は２階から見る事ができ、製造過程から配送までの流れを見学できました。

見せる工場として特徴的であると感じたのはセミナーを行っていることでした。工場の人のご好意で、途中からではありましたが、私たちは別の訪問団体と一緒にセミナーに参加させていただきました。セミナー内容は工場見学をしたのち、研修室で馬路村の発展の様子を映像資料にて紹介するというものでした。このように馬路村の村おこしのスタイルを視察に来る団体は年間300団体にのぼるそうです。

工場を見学しセミナーを聞いて、見学者が製造者、農協の人たちであれば今後の生産加工のモデルケースとして大変参考になるだろうと思いました。研究のために来た私たち学生にとっても、村おこしの過程をよく知ることができたのでとても勉強になりました。

１９８６年に「ゆずの村」が「日本の100村展」で最優秀賞を受賞し、馬路村が脚光をあびてから２０年以上経つ今も村おこしのモデルケースであり続けるのは、工場の人たちの案内やサービスの丁寧さ、施設の設備のわかりやすい表示など、馬路村が人との関わりや、思いやりを大切にする村ならではの人の温かさを感じる村だからだなと感じました。

＜株式会社エコアス馬路村の訪問＞

私たちは２日目にエコアス馬路村へ行きました。株式会社エコアス馬路村は２０００年に設立して以来、村のやなせ杉の間伐材を使用した木製の商品を生産しています。その商品は座卓、テーブル、サラダボール、電卓、名刺、うちわ、かばんなどです。木のブリーフケース「モナッカバッグ」は丈夫で軽く長持ちし、少し高価ではありますが海外でも注目されています。薄くスライスした杉を何層にも重ねて生産しているため、割れにくく丈夫な商品をつくれるようです。

工場では電気代をかけないために、大型機械を一度に全て稼働させるのではなく、少しずつ動かすという工夫がされていました。エコアスの従業員はほとんどが馬路村の人ですが、ＩターンやＵターンをした人もわずかですが働いているようでした。

商品の客層としては４０代～５０代の人が最も多く、孫や身近な人への贈り物として購入し、また２０代の人は自分へと購入する傾向があるようです。少し高価な商品であることから若い人の購入が少ないようです。従業員の方はこれからも色のバリエーションを豊かにし、実用的で若い人にも購入しやすい価格設定を行うなど、色々な商品を考え広めていきたいとおっしゃっていました。

この地元の杉を利用した製品製作活動が大きく取り上げられたのは４年前からです。国や村からの補助を得て、ドイツ、パリ、ニューヨークなどに海外進出しています。

エコ活動の一環として紹介されました。

写真２：村内の土産物販売所「まかいちょって家」にて

＜「ゆずの花」でのインタビュー＞

私たちは馬路村でパン屋「ゆずの花」を営んでいる市川堅太さん・結衣さん夫婦にお話を聞くためお店を訪ねました。馬路村に観光や研修などで来る人には「何で馬路村を選んだのか。」「田舎暮らしは大変でしょ。」などとよく声をかけられるらしいのですが、毎度のことであっても私たちの話が役に立つのなら…と言って閉店後、帰宅寸前だったにもかかわらず時間を割いて丁寧に答えてくれました。

お二人はもともと北海道で自分たちの店を持ち、お子さんと共に暮らしていました。馬路村農協が求人ネットに出していたパン工房経営者募集の情報を妻の結衣さんがたまたま見つけ、ご主人に内緒で申し込んだのが始まりでした。書類審査や農協組合長との話し合いの結果採用になりました。実は馬路村のパン工房は、これまで２度経営者が替わっており、良い話だけではなく、厳しさも聞き、理解した上での決意だったそうです。２人は田舎暮らしや小さな村のパン屋に憧れたわけではありませんでした。最終的な決め手は、「馬路村が有機栽培にこだわった村だということを聞いたから」・「ここなら理想のパン作りができるかもしれないと思ったから」だそうです。

理想のパンを作るためのこだわりの材料は高知県内ではなかなか手に入らず、田舎での材料の仕入れに苦労したそうです。村にはまだ光回線が繋がっていないなど、通信面で多少不便を感じることがあるといいます。人間関係はそれほど苦ではないようです。馬路村には新しく入ってくる人たちを歓迎する雰囲気があるといいます。しかし、入っていく側はただ受け入れられるのを待つのではなく、自ら積極的に村内の運動会や会合など人が集まるイベントや行事に参加することが大事だと話してくれました。人口の少ない村に馴染むには、コミュニケーションを取れる機会を多く持つことで、親しくなっていくのがコツのようです。

山奥にある田舎に新たに人を呼び込み、住み続けてもらうためには、受け入れる側、入っていく側ともに信念を持っていること、また、それらが合致すること、あるいは理解し合い、お互いが納得した形で生活していけるようなコミュニケーションの場や機会を設け、積極的に参加していくことが大事であると分かりました。村民同士、また村民と新しく村に仲間入りした人たちや観光客のコミュニケーションの場として、パン屋「ゆずの花」は一役買っているようでした。

＜高知県内観光＞

一日目、午前５：３０夜行バスで高知駅に到着。馬路村へ行くにしても車が便利なので、高知駅の近くでレンタカーを借りました。まずは高知市内を観光する予定だったので、３０分ほどかけて桂浜（写真３）へ行きました。桂浜公園内にある龍馬像の前で記念撮影をし、砂浜を散歩しました。その後坂本龍馬記念館へ立ち寄り、たくさんの資料から龍馬が活躍したころの歴史や文化を学び、午前中はゆっくりと観光することができました。午後はくねくねの山道をのぼって馬路村へ。自転車をレンタルして村内散策をした後、宿泊所前の安田川で川遊び。

二日目、午前にゆずの花で焼き立てパンを購入してから馬路村を出発し、お昼頃高知市内に到着。ひろめ市場にて高知名物かつおのたたきを頂いた後、高知城を観光中に名物のアイスクリンを頂きました。最後に高知駅内でお土産を買いました。「ごっくん馬路村」は、馬路村内で買うと１００円でしたが、高知市内、高知駅内では１１０円～１２０円と少し割高になっていました。研修旅行の合間にうまく観光を取り入れることができ、とても充実した二日間を過ごすことができました。

写真３：桂浜にて

<馬路村を訪問して>

農業協同組合、ゆずの加工場、株式会社エコアス馬路村、ゆずの村のパン屋「ゆずの花」と馬路村の主要な施設見学、そこで働く人にインタビューを行いました。どの施設の方も快く時間を作って下さいました。

馬路村に到着してすぐ、宿泊施設の方に「分からんことがあったら、そこらへんの人に何でも聞きや。」と言っていただきました。実際、道案内や施設についての質問に、施設の人はもちろん、村の人も丁寧に答えて下さいました。馬路村には馬路村の村おこしを研究するために多くの学生や全国の農協や村の重役の方が頻繁に来られるそうです。したがって村の方々は外部の人への対応に慣れており、丁寧かつ明確な受け答えをすることで、とても気持ちの良いコミュニケーションをしていると感じました。馬路村には、日本の中山間地域における内発的開発ための良いヒントがほかにもたくさんあるようです。

現時点では東谷氏のおっしゃるとおり途上国の内発的開発に馬路村の村おこしのモデルは適応できないかもしれません。しかし食の安全の確保、交通運輸システムなどの整備を行い、人々に親しまれる商品を開発することができれば、途上国でも馬路村のモデルを活用して、開発・発展していけると考えられます。